厭蝕太平樂記　三拾九

へ13
3553
29

厭蝕太平楽記巻之弐拾九

目録

一 幸村天王寺を陣所となす事

附り 島津義弘使者頼みに来る事

一 名将天番筧随見を逃す事

附り 伊集院門左衛門が事

早稲田大學圖書

門 へ 13
號 3553
巻 29

早稲田大學図書館
昭 33.11.10 受
藏 書

一 厭蝕太平楽記巻之二 [illegible]

幸村大望を起し偽て[illegible]

附 [illegible]

爰に[illegible]幸村ハ七月五日夕暮より人を
[illegible]して今宵頭ふ松村を乞[illegible]押
[illegible]して[illegible]入[illegible]に口
今宵[illegible]
[illegible]天下ハ何が[illegible]
[illegible]幸村が[illegible]

申しけるは王将人々に向ひ申しけるは我は四六の歩
の陣を先に進ませ其手に乗て先づ後に左の段
より仕掛る事を専らとせん桂馬の意へ仍て桂へ参り
桂馬又をば以下と定め出て捨文角行の方へ
下の桂馬を三手に角の段桂馬を桂馬とおせて
左座敷又これも向へ来ぬ北の玉将にて浅元人歩
は銀なり大飛車をも大切にせず左桂馬香車
大将飛車は左に寄り我れは銀に
人々そのうへ桂香にこもる其身人又いの上六

伊勢の武部は大く飛馬を引き浄きかゝる程大
鈴鹿を出て左右にしこゝに到る事香人時の色を紀
く其事阿弥陀の柳を桂馬の香車をて何
柳の出れば金の手を引きて後桂馬をなしに程是西
大将は王将飛行をして歩はいつしか此阿弥陀の本
なかなか高き所の居人も先へ出て一に関の
大事大歩を多く之を甫とし以て歩を返して西國
を兵ともに大勢を悪兵を銀の所を紀州
こそ其身は只飛車を取りて大将とは思ふ我

しく武士たらんもしかれバ人を連の上子死ぬる
国人なるゝ命をさへかろしく押よせ申すまじ
専ら利気をひとつ心をかけ名は残るの事
なかなか念仏申すは女の大胆さにて振舞まじくと
なにしか何事も念仏を称へ後に道理を依く
物をとゞまるとなく声ばかりなれバ尊き落る
あまりに言とてもく捨て仏とも阿弥陀を頼み
誠やうなく浄土にて有難くしても阿弥陀を捨
道しんなる人も此の世の事に身をまかせ

小平なくしと称むに付南無と申は之を少しも敷
しくして名号し今も念仏申すとも後生をかけん
なれど誠に極楽阿弥陀仏を南無と申す事も如く
深くたのみなく念仏修行を申す心をかけ頼みしく
大事の道の上は仏をよろこび和らげ国人の乳母を
あさましく人を押くしも無の事もなく仏をうる
思ふ振くかひきられども名の為国の為
利害をふかく求めり日本の国の
衆生のために父をしたがひ生死の身を後世の恩

めん様御様のゆるかゝづきて右手の添たるを
其御ふきのあへしあそこしたれ惜あさばとく
跡の之人々になおふ御はしんを利害かつぬけり
扨れどは浪花に宿じい宰臣にみなりけるとて
見れば南北の方へ掛人首の首をならる
我々人様をと窮して秋月あいて國人がもの
去れとは浪花章村が四足は若かられれた
國人の口なりしおりひしさまして呉果なくしけむ
けり殿まりぬかなしいけ様よ止らいあへ宗民

辛度して解見る山の麓よ今給うて國人を静め
まづしかれば此老翁わるゑしたまいて悦び井と
谷まで出しる村人集り草国此る浦をとおし
くて楊をとりけるとして所のおある大將をとら
前して静り回して怖り知して章村は永来ん
次又字を使へし康門人る山ま人會して人はいかいある
又あち章村よ出てむるとおもて教まれて
九郎はゑ為ひあるを様子あちゆいしの役はつかる事か
如何ある奉子一向人くすさ将くして末を申ほ

まことにおもひしれるハ先朝御自身の儀をば
ふかく思ひ給ひ清く見あれしかば若宮を叡慮
にかなひしかバ都の中にて事をばゆかしと
おもはれバ尊氏方にて糺されけるに此御身が僧となり給ひ
軍は数代の将軍として今以て政を取らせ給はんことを
深く思へる御心の仰を見て将軍のことを申し付けます
さてその後ハ今しバし一度将軍して直義をとめ
或ハ大寺に義宗の乱逆をもうしくハ合はせんと
諸の源氏を以て大将とし兵を起こし今ハ南帝は

例として将軍の君主の為に天下の御尊もなく兄弟なりといふとも
南朝の方へ心を寄せ将軍も時をえて纔か此の義武を討
帰りて知行同じ内にて鎌倉の奥の方にて打ち入らせ
又いずれ何事も有るべしハ然るの後に今の天下の兵も
つねに思ふ事なし是を聞バ都の事の出陣さへ
拙く徳の人を見れば天下の大名の状況を知らずや
都の大事を申し出して南北の口の中に
押し立て
もう今にて

我なきのちもいとゞ御恵[illegible]島[illegible]あり
平伏すれば義[illegible]出てかの[illegible]代[illegible]
を以て[illegible]漂[illegible]
時に何[illegible]大[illegible]の[illegible]となり[illegible]
大[illegible]宮[illegible]
大仮[illegible]を[illegible]人と[illegible]
あし[illegible]出[illegible]
[illegible]山[illegible]も[illegible]切[illegible]
[illegible]義[illegible]の四[illegible]

こゝろ伊[illegible]
兵[illegible]を集れにして[illegible]の[illegible]を
[illegible]大[illegible]
[illegible]の[illegible]
[illegible]何[illegible]
力[illegible]合[illegible]
[illegible]人[illegible]の代
[illegible]
[illegible]

かれし勿論手の者ども交はれへおらしき
軍をなし探題勢をもつて菊池が手勢を
討ちとらんと伺ひしが菊池武時が旧(?)
頼みし国々の者どもは皆かの探題に心を
合せて寄せ手をいかにせんと思ひしかば
馬を返して攻め入らんとせしが大勢に
取り囲まれて二百余騎の兵共を
切り捨て切り捨て戦ひけるが
大勢の国人皆此方に打ちかかり
手勢の国々を攻め落して二百余騎を

周く四国を攻めて菊池が旧き年の内
いくばくもなく高国を攻めける一族の家
くわへて文武両道の国人に申しつけ
つけ国々を攻むる時は必ず振方の軍を
乾の軍術をもつて攻め立てて
なれしき今の明に軍者が申すところは
そのよろび事の術を心得て
定めて見は軍をさせ一度は
また大かたの軍列を下し[illegible]

のちにし定めんと申し後がたく[illegible]事ハ威(い)[illegible]
まおけず(?)そむきし後醍醐(ごだいご)の人と云われし義[illegible]
君[illegible]けし出[illegible]沖ふ(?)の比(ころ)[illegible]
まてし[illegible]せしかなれバ付[illegible]
伊勢ゟ人数を揃へさしむかハ軍(ぐん)師(し)の[illegible]
まさかれかりけし程に六十余州(よしう)の兵(へい)を残(のこ)さる
者(もの)の軍(ぐん)術(じゆつ)をひとずけ国の勇士を催(もよほ)し
揃(そろ)ひなバ国中か[illegible]のしまりかハし[illegible]
追(おつ)てまむき[illegible]せし[illegible]と定め

摂州(せつしう)の勇士六百余人を催して相従ひ(?)[illegible]
けれハ六波羅(?)へ[illegible]四国の[illegible]寄(よせ)[illegible]
とりける[illegible]番[illegible]東寺(とうじ)[illegible]
八幡(?)[illegible]一手[illegible]土佐(とさ)[illegible]幕[illegible]
いま入道[illegible]中英[illegible]大塔[illegible]四国[illegible]
人の勇士(ゆうし)[illegible]
をとりし陣[illegible]
又[illegible]後藤(ごとう)[illegible]
さし[illegible]紅[illegible]佐(?)[illegible]六百

七振舞人は勇士舞ある[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の勇士[illegible]
[illegible]勇士[illegible]
[illegible]
[illegible]太刀[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]両人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]両人[illegible]
[illegible]

閣(かく)じくしけれバ有がたき君の恵ハ又とハなし御感(ごかん)
深(ふか)く是ぞ新田中将義貞をもつてし給ひ旨(むね)
しめ大塔宮(?)の御かたへ参りけれバ
思召(?)けるのミにて次(?)へ入られバ大(?)ひ(?)と
召しかかへ有(?)けるに侍(?)の人々
はさん中将義貞とわかつていふ(?)ハ拍手の
姓(せい)をとふハ俺(?)勾当の内侍(?)と
なりて又義貞の大将の人をとりもち
かくれけるを篤(?)とりて後に中将より国(?)へ

中将より子のよし通(かよ)ひて数(かず)の留(?)いたり(?)
詳(?)しく思(?)しまでのかよひ文(ふみ)伴(?)ひ流(?)
上(うへ)のまゝ取(と)り次(?)ぎ給ひ漆(?)殺(?)を
絶(た)えさせ御涙(なみだ)にむせび給ひしが
くらくらと流(?)人(?)のたもとをしぼりつゝ
全盛(ぜんせい)し行末(ゆくすゑ)をまもりて君(?)のためにす(?)
わなく(?)勾当(?)の内侍(?)をしたひ右(?)中将の御札(?)
かく義貞中将をなぐさめ中将と(?)の縁(?)を
勾当の内侍(?)ゆゑにとのみ中将(?)の御(?)ために中将

有難く此儀ハ上より様子よ為先中に
詔ありし嶋津義久殿へ夜に入て御請ハ
せしむる所を伺ひし処天下の文書奥州を
近く取実国にての者ども申ていまだ来られ
ずしるし国々へ申て訴へ出ばまた来られ
せんとて命じ有けれバ伊集院忠棟ハ又義
久ハ今元の也武運つきて最早落
仕るとはかる石見ノ守殿の如く思ひ
此月代をとりて剃髪して龍伯と号して

あくまでも大坂方を申しまて関白殿下の
御意を請く申しかれども寄手となりたれ
ばこれハ先ず従ひて人質を見せよと仰せらる
嶋津右衛門ハ是より又薩摩の国の城にて伊
集院川上等の人々と参り候ひて申けれ
の城ハ源氏の余党より一と度ハ人を入れ置
申さず伊集院川上の人々申ける
其方が是れ等の人々を申しつけたる
ハ御ことに人を以て命を申さた大将の御子

するものゝありけるに背き大逆無道の秀頼を
かくまひけるさへ悖るに凶徒に与し謀叛
測りかたきに仙洞より中将に於て院宣を
蒙り給はず我等か心より行はんと神文を
あらためて将軍家に仕へしよし申ける国人の役に立て
まし飛騨の国の武士の人とともに討て
報しまゐらせんとて京へ上りけり
尊長ハ一条殿之猶子敏輔卿の息なり
伴う伊賀院門上様撰しけり

同年八月に至り二位の尊長法印は鎌倉へありて
都に来り潜み居たるを武士に對し謀叛を企て
中納言中将に仰せて尾張國の住人持寄を
して此事の頼を給へ月にて生ひ出ける
に所々を尋ね求めけるに大阪の浪人を
召抱へられ大将の名屋敷の近辺に住居さ
せて探り出し我か家人に申しつけ捕ゆる
事を人に頼みて討取らんと命じけれは
義を忘れ我か頼を背き給ふなかれ

えり天下の誉あり 俗ハ天下の政を行く
勝手を主張りのかりし事を勤の場合へ之哉
人の得ず惑れや 政を前として軍師有るい
小忠よりし君代りに政を文武のもはら以盛の名誉を
房作ら部を以し其島津の任ずる旨ですって
其地の人々の望をす然るに松平の姓ととらせ
らいのの中務ハ島津が家と懇に立ち給ふ
らん我れバ作ら部をを配賀さ申し御國を治く
いうとくの其間しと合よ麦十余文を上す事に其文と

てん井御殿を於の小森の又兵衛よ依れ共
に高間うの相亲の名字の父分りハいうと義氏
然りし於て己らんいの行国令の代の為れバと
さく是程のとてむき御夜来るるハ高国と深せ
なわち武家ハよ及ず公家の友臣将軍の
政権をさず平生人々の所務を取れハ動命
なり我の父を公バ存ずるをすゑの松平と称
らせ人其書類さ國人名ハ如何れま思すしいふ
羽紫の人もし口をる揃くらしを事八元八大守の如く

正掃し方親貴くいはんとすれば此國は夭
将分今三人よりと武家もしこれに候ては立高康
の任經をかしくりうる事ば絶を他行ける
る事敷し和ればたゞのこるりの類を清し光へな
しからずは大様反もとなくいはせんものかすよ手君か
たまれ我れの伊を父へ御待仁和ば此國手
樹ありて候ある手清けりて國人分がいわく
なりてし請まよのつくべししてやくし光人とつくく
が前世剣悪事れしがたは何のうゑいろらしはまま

云者もありと返答御しけるニ人ときは盛ん
拾分くして江戸へ帰る伊兵衛浅川上杢の國の
浪人只将御うそれるも人々も能もあらずかゝる塾
有りし御事有るが枢て参勤にありし貿人人
ちを取ひされば子供連の者くも足されば世に出宗
後ありて江戸を立し浅くも追入て取出し紫
浅川上下の町人方事はとも取りたる御事ありければ御たりしと
成美浪の此有く出して上る取美人右手の郷
定取くしてもの浪宅を見尾して江戸表

給それ色欲仕ぬ夜を有るをいかりかしの
汲変しおけすくと人道にも使ひさを未されとも
ころし心地とかなしめるいさをさなられや哉
此のの見人の面まい教しよりせる凡人何の
いくかるくは暮又もいあり二度ゆ見由来あるし
此成あし累世ちし座あり時は兵問にいけ人
富貴一体して理すことし深秘をとつ行ふ安路
跡道能し昔の以もみかく義理ずすありけると
品の者の好く本村の上王能とえひのもあを

生たる村に信足慌川上八的圓の保よ信足慌寒
りしかし御請して兵粮などを用ゐしすけるに
又我等の存へ此方の用ことをゆすくあるらむ
為人の為ならしく此義の内意をと表すに
け使ををいかにもつくしけんのはめしも前後に遠路の
けるをは為人信足慌川上すしも命や信足慌兄弟
頭義君の我のいは生捕し使信をも携問ずる
白状されれは抜ハ本村ハ品人を赦せしとて
ゑきしく対知しけるハいとも世にもたれ而れバ

幸村が小路まで是も敵城の勢をとりかけしが始
様の者にて大勢一騎よりもしくして関東
の勢は信濃川上の城を攻てよる者は三人や
もされけれ共かね而して退けるかば此旗に備
に従ひ引上退きて信濃の陣は旗本の様
まで旗本に登り陣に引退て御本陣は大将の旗
本にて是は旗本陣の大将三千ばかりの勢にて
日向安芸国の境に在陣は内藤信濃守七万石にて二万八
備前は播磨守一万の勢のうち伊勢の国主の秋月
備後守とも合戦の時に兵庫大将軍八千余騎

仮托前の後は信濃の洲浜の者又五万石余と云ふ事
にて発足の道に中松月十日夜は石の陣にて大
出立の京都松浦中川五万石の大将が籠りして二万
余騎の大勢を率ゐて国の境の岩城へ打寄せり
のみ信州の川上の陣より陣の通路を押へて相
待ける所に此より各々早く伊丹左衛門の手勢
入れ大将は左京兵衛佐の手勢武蔵国五
千人にて向ひつゝ人々にて菱川島田大将の人在
七千余ばかりの人数は何れも大将の陣の旗をとりて

されば尊氏の[illegible]家士の[illegible]馬より[illegible]し風
にたびおや[illegible]下げに[illegible]して[illegible]しければ今[illegible]
の[illegible]を[illegible]入[illegible]なしたりし[illegible]を[illegible]して[illegible]
摂州上[illegible]流は[illegible]を[illegible]ぬ二万八千の
[illegible]して百[illegible]九四万余人[illegible]して[illegible]有り
有り摂津[illegible]は[illegible]海[illegible]の[illegible]一[illegible]手[illegible]
[illegible]八所[illegible]今[illegible]村[illegible]井村[illegible]山村上[illegible]村[illegible]村
山[illegible]村[illegible]村有[illegible]の[illegible]所[illegible]方[illegible]の山
の根[illegible]して[illegible]の[illegible]半[illegible]ども

あり生田[illegible]林有[illegible]小[illegible]を初[illegible]して[illegible]
[illegible]有[illegible]百[illegible]の[illegible]門を連[illegible]上の石
[illegible]の[illegible]して[illegible]れば[illegible]の跡[illegible]あり[illegible]
けれど[illegible]南は海[illegible]岩石[illegible]船路[illegible]
西[illegible]けれど[illegible]なる川[illegible]
[illegible]山[illegible]谷[illegible]谷川[illegible]水
[illegible]村[illegible]けり
[illegible]つき[illegible]村[illegible]十[illegible]と
二万余騎を[illegible]大[illegible]を[illegible]

うつくしき様なる川の辺して船を浮べやまとつき
されば十六ほとけまで羅漢出来りましてまた舎せり
その瓔珞をも利益し六十の流をあつめけり
瑠璃といふ亀に海山に知るよりお茶まで
見えけると窟文字一面の内に知るまで金様
宮女に氷を目にふれて浪をあつめ給ふ恵者
一艘に十八人づゝと乗せて聲鐘ふく響は古
ろまき樹木の枝に雲風ふけし聞ば人々の中の乳大
に吹出し音も風は波も西東も一ツ形もなし

仏には宝所の景色をなして見るは人目をおどろかして
給ふといふ事とくと聞て枝を安置して
羅漢の船なる川に浮べて横目に見とまりけ
水ぎはの音風に乗りて流しよりて瑠璃に
大様しかば千年の露をもなして大岩の下し形の
山は我年も手れども藤の葉もなくといふ鳥
あさまくまゝなれぬし年にお如きよとも伏しと
形の上より山を越えてなれば夜は侭ある大蛇の
住れ出しあつさに荒しふゑなるに声れば里せを

たまれ然しかの事にてわかれんとなれバいかにする
たましひ生のかりに落ちしをはからう
伊たもとをのべし男女ぶらりと出て露に
むかし飛花若葉となりず此村家の辺に
水無瀬の御所は祐兄也しくるも中の御一万事人
見し羽意の大名おも風とて忘れもして御仲かる
れはあらしめておもかすとも中けしく又ばお
こここし又はおはれる事とおもしろしれば伊豆巣鷹
川上弥八一旅籠屋の間なかると大敵はあらん迄さ

なるらんのは然へても三の九年会て楢かし由人
夜をも気さし河井村ましわけ打られ長窓伊勢
五両目の間に抜きら申しける人まつられさる事る
頭かな名の刀ぬきぬへて、ゆるしを討らん遊敵に打ち百人けれ
ある又より敵山中上る寺の修行者の家
甚の地あれば伊豆巣鷹川上などして夜の雲かく
まつ陣の陣へしられ大ある子の物見かれたし此統
へそうも在四来とし伏勢もかく敵にもあ来てや十
あまり乂文の大将と相しかけ遊られに仕く

長将とは如今は先追ふて手を差遣して申すべく
然るに伊集院川上両家の一族ども叛逆なすをしらず
公方へ今は九七万余の勢を引て起りけるを聞給ひ
家臣の此よしを見て士卒の面々にも出奔してこそ家人
の勢を以て大分を率して早速に兵中に入て合戦
せて亡びければ先遣にて手前にて落花を散くの如く
兎の后中以前に薩州華村の家僕を閣し
入せ共まだ人を以て重臣の如く出陣す
頼ひの御使として御当世もよつて御家の中

あれば是を見て薩州の内證をしてこそ
義を以てなすべしと申けれ
早く相手として当もの年来から
まことに国を寿として中にも
り入る事は伊集院川上両人
ある出陣してその往返
けるが太閤入て御家
の中にも薩摩
真田

貴ふとのきへあるしまゝ御体に還らく
ませり爾来御落着打取たる申し上げられ
子にて問ふ御食しなく御惟を聞しめ大に
なげき給ひ真奥の御旅立ありて深く御悔ありて
せられし医師に往時も向ふとしてける下に
元和二年四月十七日御他界あり御年七十五歳
かり久能山にをさめまつり後駿河国内にをさめ又
三代将軍家光公の御世に日光山に改葬し奉る
天下をしろしめす大権現と崇め奉りし

その御世ハ よろしくしづまりしかや

厭蝕太平楽記巻之四終